芥川の短歌「桐」について

山敷和男

芥川の短歌はほとんど研究されていない。また、研究に値するほどの文学的価値をもっていないのである。芥川の短歌はその全集でも継子あつかいされているのが現状である。

けれども、芥川の初期を研究する場合には、見逃すことのできないものである。その発表場所が『新思潮』でなかったので、のちの研究家の目にふれなかったという点もあろうが、発表回数からいえば五回（『心の花』に四回、『帝國文学』に一回）であるから、翻訳よりも多い。制作態度や作品内容を度外視してよいならば、これは芥川がいかに短歌の制作に力を入れていたかを示している。

この初期の短歌に着目したのは木俣修氏である。氏は「白秋と龍之介」（『白秋研究』所収。昭21・12　文化書院刊）と「芥川龍之介の短歌」（『短歌研究』昭31・9）の二論文でこれにとりくんだ。しかし、この二論文とても、木俣氏が白秋門下で、目下『形成』の主催者であるので、かなり片寄った結論になっている。このことについて今ふれる余裕はないが、とにかく氏によって芥川の初期の短歌が、白秋、勇の影響によってできたことがあきらかにされたのは、大きな収穫であったといえるであろう。(註1)

けれども、芥川の短歌の実質が、木俣氏のいうように「白秋的なもの、勇的なものの混合されたような恋愛的雰囲気が中心となった、青春のもののあわれが歌われている」（「芥川龍之介の短歌」）ものとばかり断定しがたく、勇的なものよりむしろ白秋的なものに近いのではないかとおもわれるふしもあるし、かつは、数年後には大正文壇の中心に位置を占めるようになった芥川が、なぜこの時期にああした完全な模倣歌をつくったか、ということも考えてみなければならないとおもう。そこで、ここでは、まだ木俣氏が検討を加えなかった「桐」をとりあげて考えてみることにする。（ことにこの作品は後者の問題を考えるのに、いい手がかりをあたえてくれる。）

一

「桐」十一首は大正三年五月の『帝國文学』（新進作家特輯號）に柳川隆之介の筆名で発表されたものである。(註2)　これには（To Signorina Y. Y）という献辞がついているが、これについては

のちにのべる。

この十一首は、すべて白秋・勇の影響をうけている。具体的にそのあとをたどってみよう（○印が芥川の作品）

○君をみていくとせかへしかくてまた桐の花さく日とはなりける

これは、

ゆくりなく庚申薔薇の花咲きぬ君を忘れて幾年か經し（『桐の花』の「白き露臺　女友だち一」）

の模倣である。

○君とふとかよひなれにしあけくれをいくたびふみし落椿ぞも

この歌は調べは勇のものであるが、一寸よりどころにしたものをあげにくい。

かにかくに忘れかねつも君が頬にわが頬觸りしも幾度ぞそも（『片戀』の「片戀」）

にやや似ているが、『片戀』は大正四年三月の刊（籾山書店）なので、やや疑問がのこる。

○廣重のふるき版畫のてざはりもわすれがたかり君とみればか

吉井勇の

廣重の海のいろよりややうすしわがこの頃のかなしみのいろ（『昨日まで』の「秋と冬」）

鍬嗄れし歌六の聲もかかる夜に君と聽けばか忘れがたかり（『昨日まで』の「紅燈」）

の二首からできている。

○いつとなくいとけなき日のかなしみをわれにおしへし桐の花はも

「桐の花」「かなしみ」はもちろん白秋の語彙。白秋に

やはらかきかなしみきたるジンの酒とりてふくめばかなしみきたる（『桐の花』の「銀笛哀嘉調　I春十五」）

という歌がある。全体的に白秋的なものである。

○病室のまどにかひたる紅き鳥しきりになきて君おもはする

白秋の有名な

春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと戸の面の草に日の入る夕（『桐の花』の「銀笛哀嘉調　I春一」）

をおもわせる。また

日の光金絲雀のごとく顫ふとき硝子に凭れば人のこひしき（『桐の花』の「銀笛哀嘉調　III秋一」）

の雰囲気もある。ただし、直接模倣したとはおもわれない。

○夕さればあたごホテルも灯ともしぬわがかなしみをめざまさむとて

これは吉井勇の

この街に紅燈多し歡楽のかなしみの灯をともしけるかな（『酒ほがひ』の「悪行」）

君とゆく河原づたひぞおもしろき都ほてるの灯ともし頃を（『酒ほがひ』の「祇園冊子」）

の二首からできている。

○草ひろの帷のかげに灯ともしてなみだする子よ何をおもへる

これは勇の

ゆふぐれの河岸にたたずみ水を見る背廣のひとよ何を思へる
（『酒ほがひ』の「ＰＡＮ」）
北海の夕焼雲のうすあかりほのかにさしぬ涙する子に（『酒ほがひ』の「海の墓」）
の二首に似ている。
○くすり香もつめたくしむは病室の窓にさしたる泊芙藍の花
着想は『桐の花』の
長廊下いろ薄黄なる水薬の瓶ひとつ持ち秋は來にけり（「雨のあとさき　Ⅱ蟲の鈴虫　立秋　退院の前の日」）
に得てもいるだろうが、より直接に
つつましき朝の食事に香をおくる小雨に濡れし泊芙藍の花
（「春を待つ間　Ⅲ雪Ⅱ」）
四十路びと面さみしらに歩みよる二月の朝の泊芙藍の花（「春を待つ間　Ⅳ早春二」）
の模倣である。
○青チョオクＡＤＩＥＵと壁にかきすてて出でゆきし子のゆくゑしらずも
これは勇の
われひとりＡＤＩＥＵと云ひて戸を出でぬきさらぎの夜の霙のなかに（『酒ほがひ』の「ＰＡＮ」）
の模倣である。なお、この勇の歌は、昭和二十一年十月の文芸復興社の復刻版では
われひとりさらばと云ひて外に出でぬきさらぎの夜の霙のなかに
と改作されている。（『吉井勇全集』第一巻―昭38・10　番町書房―の木俣修の解説による。）
○その日さりて消息もなくなりにたる風騷の子をとがめたまひそ
「消息」は勇のよく用いることばで、
消息にいはくその夜の停車場の涙かわかずありてかなしき
（『酒ほがひ』の「後の戀」）
うらがなしじゃがたら文にあらねども涙もよほす君が消息
（同右）
など、多い。「風騷の子」は勇の短歌にありそうでなかった。
騷客のわれもあはれにわかき日のもののなやみを額に刻みぬ
（『酒ほがひ』の「わかうど」）
という歌はある。全体は
あはれにも魂いたく傷けし逃亡の子をとがめたまふな（『昨日まで』の「逃亡」）
にヒントを得ているのであろう。
最後の
○いととほき花桐の香のそことなくおとづれくるをいかにせましや
だけは、あきらかに白秋的な歌だが、類似歌をみつけられなかった。
終りの日付は（四・九・一四）で、一九一四年（大正三年）四月九日である。制作時や、発表年月からいっても『心の花』にのった「薔薇」（七月）「客中戀」（九月）「若人（旋頭歌）」（十月）

よりも早く、まとまって発表されたものとしては同じ月の『心の花』の「紫鶯絨」とならんで一番早い。

前にのべた如く、木俣氏はこれらの歌について（氏は「若人」についてのべたのであるが、芥川の短歌全体についてのべたとってよいとおもう）「その内容は白秋的なもの、勇的なものの混合されたような恋愛的雰囲気が中心となった、青春のもののあはれが歌われているのである」と評しているが、どうも白秋的な要素がつよいようにおもわれるのである。

『酒ほがひ』『昨日まで』二歌集の中の小題をみてみると次のようである。

『酒ほがひ』

癡夢第一　癡夢第二　癡夢第三　夏のおもひで　酒ほがひ　わかうど　悪行　後の戀　PAN　祇園冊子　海の墓　羈旅雜詠

夢と死と

『昨日まで』

郊外　逃亡　秋と冬　夏　谷に來て　紅燈　昨日まで　二藝人

つまり勇の歌には物語的なところがある。小題を通してみればあきらかなように、彼の歌は一首一首としての独立性をもちながら、なお心してよむならば、その一連の作から一篇の恋物語をきくことができるのである。

そしてその歌風はあくまで豪邁で男性的である。恋の歓楽、恋の哀傷、にくしみ、嫉妬、あらゆる恋の感情を、おおらかに、あけっぴろげに歌う。

夏はきぬ相模の海の南風にわが瞳燃ゆわがこころ燃ゆ（『酒ほがひ』の「夏のおもひで」）

この君はかいなでびとの言葉にも笑をむくいぬ情あるかな（『酒ほがひ』の「癡夢第一」）

ああ遂にわれひとりなりいつわりの戀を戀としありしとがめに（『昨日まで』の「昨日まで」）

この歌風は万葉人のそれに近い。よろこびをよろこびとし、かなしみをかなしみとして、勢一ぱいの激情をこめてうたう。

一方、『桐の花』の方はどうであろうか。その小題は次のようになっている。

桐の花とカステラ※　銀笛哀慕調（Ⅰ春　Ⅱ夏　Ⅲ秋　Ⅳ冬）初夏晩春（Ⅰ公園のひととき　Ⅱ郊外　Ⅲ庭園の食卓　Ⅳ春の名殘）晝の思※　薄明の時（Ⅰ放埒　Ⅱ踊子　Ⅲ淺き浮名　Ⅳ蟾蜍の時　Ⅴ猫と河豚と　Ⅳ路上）雨のあとさき（Ⅰ雨のあとさき　Ⅱ晝の鈴蟲）　秋思五章（Ⅰ秋のおとづれ　Ⅱ秋思　Ⅲ清元　Ⅳ百舌の高音　Ⅳ街の晩秋）　植物園小品※　春を待つ間（Ⅰ冬のさきがけ　Ⅱ戯奴　Ⅲ雪　Ⅳ早春　Ⅴ寂しきどち）白き露臺（Ⅰ春愁　Ⅱ夜を待つ間　Ⅲなまけもの　Ⅳ女友どち　Ⅴ白き露臺）感覺の小函※　哀傷篇（Ⅰ哀傷篇序歌　Ⅱ哀傷篇　Ⅲ續哀傷篇　Ⅳ哀傷終篇）白猫※　ふさぎの蟲※　集のをはりに　（※印は散文）

ここでは「薄明の時」や「哀傷篇」のあたりに多少物語的な要素が感じられるが、勇のものほど明らかでなく、むしろ季節の推移にともなって変化する情緒の変化が『桐の花』の主調をなしている。その歌風は次の如きものであって、あくまで繊細で、女性

的である。

銀笛のごとも哀しく單調に過ぎもゆきにし夢なりしかな（「銀笛哀慕調　Ⅰ春二」）

きりはたりきりはたりちゃうちゃう血の色の棺衣織るとか悲しき機よ（同夏三）

したがって白秋は恋の哀傷を、心のかすかなうごきを、神経の病的なふるえをうたう。

ヒヤシンス薄紫に咲きにけりはじめて心顫ひそめし日（同Ⅰ春四）

あまりりす息もふかげに燃ゆるときふと唇はさしあてしかな（同Ⅰ春十一）

さて、以上のごとく白秋と勇の歌の特色を考えてみて、芥川の「桐」にもどってみよう。「桐」の世界は、歌のことばづかいのみを考えてみるとたしかに、白秋・勇の混合的なものである。がその中味、歌いぶりはどうであろうか。

君とふとかよひなれにしあけくれをいくたびふみし落椿ぞも

廣重のふるき畫画のてざはりもわすれがたかり君とみればか

夕されば　あたごホテルも灯ともしぬわがかなしみをめざまさむとて

草ひろの帷のかげに灯ともしてなみだする子よ何をおもへる

青チョオクＡＤＩＥＵ.と壁にかきすてゝ出でゆきし子のゆくゑしらずも

その日さりて消息もなくなりにたる風騒の子をとがめたまひそ

最後の二首は、もっとも勇の歌いぶりに近く、結句に勇特有の表現がそのまま用いられたりしているが、全体としてみると、私にはこれらの歌は、白秋・勇の混合的なものというよりは、むしろ、白秋的なものに近いようにおもわれる。勇のような、おおらかさ、あけっぴろげなところ、万葉的な味ひ大人の風格にとぼしい。物語性も比較にならないほど希薄である。

この原因は至極単純であるようにおもわれる。つまり、芥川の生活体験――この場合恋愛体験が、勇的なそれより、白秋的なそれに近かったのである。性格的にもそうした面が考えられる。青春の欲情をおもうがままに発散させて、恋のよろこび、なげき、かなしみをあらんかぎりの力でうたいあげるには、芥川はあまりに女性的であったろう。のちの「路上」という作品をよむと、芥川がさびしそうな女にひきつけられているが、そうした彼がここにみられるようにおもう。自分の恋愛感情をあらいざらいぶちまけてしまうのでなく、恋愛にまつわる甘美な雰囲気をしみじみとなつかしがるといったタイプなのであろう。そうした女性的な弱々しさが、死ぬまで彼にあったようにおもわれる。

二

芥川の短歌は、ほとんど白秋、勇の歌の模倣である。われわれは芥川の歌のどこにも独創性をみつけられない。しかし、われわれはわれわれの生活体験をつねに独創的な作品に表現するとはかぎらない。むしろ多くの場合、切実な生活体験をもちながら、表現の段階でありきたりの手法にたよってしまいがちである。芥川

の場合も、そうではなかったか。

ここで、はじめに伏せておいた問題をとりあげてみよう。

芥川はこの歌をY・Yという女性にささげている。(Signorina は Miss にあたるイタリア語。英語に入って用いられている。)してみると、この歌の中の恋は、Y・Yという女性に対するそれである。

芥川が自殺したあと、富田碎花が「芥川君を憶ふ」(『改造』昭2・9)の中で、はじめて芥川の初恋とその不幸な結果を世に紹介した。吉田精一氏が『芥川龍之介』(三省堂 昭17・12)の中で、これをとりあげて更に芥川の手紙を材料にして補い、芥川の恋愛感情といったものを考察している。

芥川の初恋の相手は実家新原家の知合の家の娘で、きわめて聡明な頭脳のもちぬしであった。芥川の態度はきわめて真剣であって、順当ならば結婚にすすむべきところを、芥川家(養家)では極力警戒し、芥川が先方の家を訪問することをさえ喜ばないようになった。芥川は相手が同郷の青年士官と結婚する式の前日、碎花のところで最後の会見をした。芥川自身も結婚したあと、この人にあいたく、碎花に依頼したが、もちろん実現されなかった。

碎花はもちろん相手の名前をあげていない。これと書翰を材料にして、吉田精一氏はこの初恋を大正三年から四年のことにしている。

しかるに、「圖書」の昭和三十三年二月号に葛巻義敏氏が、芥川の未定稿断片「初恋」なるものを発表したあと、「以上の『伝記』的事実は、皆大正三年中のことに属すると思ふ。何故かならば、多くの『伝記』記者達の、それを大正三年中のそれと、大正四年中のそれとを混同することを、惧れるからである。大正四年中の別の問題は、明らかにされなければならないし、……」とつけ加えた。この結果、吉田精一氏の推定はあやまりであって、大正三年と四年に、それぞれ別の恋があったことになる。

「初恋」は、主人公がYちゃんを愛している。KもYに熱をあげている、TはKがYに夢中になっていたと話して主人公の嫉妬心をあおる、という話である。

他に、手紙と短歌が公表されたが、手紙二通は下書きで、一通は「七月廿八日(大正三年)一の宮にて」とあり、もう一方も、内容が同じものなので、同じときにかかれたことがわかる。

また短歌四首は、

幾山河さすらふよりもかなしきは都大路をひとりゆくこと

人妻の中の一人に君をしも歎ふ可き日のありと知れども

美しき人妻あらむかくてあゝわが世かなしくなりまさるらむ

初恋のうすら明りにしのびくる黒髪の子のありと知らずや

というものである。「桐」とにたりよったりの白秋的なものだが、「人妻」ということばがでてくるのがめずらしい。というのは、人妻を恋するのはもちろん『桐の花』の世界ではあるが、今の碎花の話とも関係をもってくる。すると、三年の人と、四年の人とはやはり同一になるようにもおもわれる。

この辺のことは想像の域を出ないし、どちらでもよいことであるが、「初恋」及び手紙の下書きの中にでてくるYちゃん(本名は伏せられている)が即ち、Y・Yではないか。即ち、この歌は

はっきりと相手があって、その人にうったえかける風の歌であって、まったくの空想の所産ではないということは、断言できるとおもう。

すでにこうした恋愛が芥川の中にある以上、それが文学的表現を要求してくることは必至である。問題は、なぜそれが「桐」のようなかたちをとったかにあるだろう。

第三次『新思潮』時代の芥川について、ここに詳しく論じている余裕はないが、一口にいえばそれは文学的実験の時期であった。創作を志す誰でもが、まず手がけるように、芥川も翻訳をやって『新思潮』に三篇発表している。即ち、二月号の「バルタザァル」アナトオル・フランス作)、四月号の「『ケルトの薄明』より」(イェーツ作)、六月号の「春の心臓」(イェーツ作)である。創作は五月号の「老年」(「桐」と同じ月である)、九月号の「青年と死」の二篇である。「老年」の方は、はじめ「隠居」という題だったらしいが(『新思潮』大正三年四月号の「編輯室より」に「柳川は山宮と共にアイアランド文學研究會の一員としてシング研究に没頭し、近時は小説をも創作し、既に「隠居」及び「油屋太郎兵衛の申譯」は脱稿せり」とある。)内容は紹介するまでもない。谷崎潤一郎、久保田万太郎の影響がみられるものである。「青年と死」は戯曲で、メーテルリンク風の作品、テーマもほぼメーテルリンクのそれである。八月号の「シング紹介」は、シング研究としてはかなりの力作とおもわれるが未完である。これらの作品間に共通した特色といったものがみあたらないのは、芥川がまだ自分というものをはっきりつかめず、その方向を模索しつつある時期であったためとおもわれる。だから芥川が「桐」のような作品をつくったとしても、一つの実験としてみれば、それですむわけである。

けれども、文学的実験とは模倣ではない。模倣というのは、制作者の創造的な心的活動を全くともなわない、完全な受動的作用であり、実験というのは、それが結果としてどうなろうとも、制作者の創造的な心的活動が能動的に働いていなければならないのである。「桐」の場合は、「老年」や「青年と死」とことなって、この精神の能動的作用が全くみられず、彼を内部からつよくつきうごかして制作させたものがあったとしても、文学的には在来のものとのきわめて安易な妥協によって生まれたものであることは否定できない。

一体短歌という文芸形式が、自然発生的なものであり、感情のきわめて素朴な表出がそのまま短歌になる可能性を内包している。人間の感動が強く、小説のような複雑な表現形式をとるほどの余裕がない場合でも、短歌ならば簡単に表現欲をみたしうる。芥川が「桐」をつくった際にも、そういう短歌独特の表現形式がかなり役立ったとおもわれる。

芥川の白秋ばりの短歌は早く明治四十三年四月(日付未詳)の山本喜誉司宛の手紙にみられる。

川やなぎ薄紫にたそがるゝ汝の家を思ひかなしむ

ヒヤシンス白くかほれり窓掛のかげに汝をなつかしむ夕

いわば、短歌は芥川にとって、手の中のもの、なじみのものであり、白秋ばりのそれはことにそうであった。けれどもそれが一

面からすれば芸術創作のくるしみを緩和してくれたことになり、手がるに、完全な模倣歌をつくらせることになってしまったのである。それを知っていた芥川は、おそらく彼自身文学の勉強の場と心得ていた『新思潮』にそれを発表しなかったのであろう。あるいは、文明、允も短歌を『新思潮』に発表せず『アララギ』にのせているので（『新思潮』には短歌はない）[註3] そうした事情もあったのかも知れない。それはともかくとして、芥川が短歌から散文へという移行の問題になやまなかったらしいのは、散文作家芥川になる際のマイナスとして作用しなかったろうかと、今私はぼんやりと考えているのである。

――了――

註1　『白秋研究』の「白秋と龍之介」は、「1・芥川龍之介の白秋観」（昭7・1「香蘭」）及び「2・『桐の花』と龍之介」（昭8・2）から成っている。この方面のまとまった研究としてはもっとも古いものと思われる。佐佐木信綱の『明治文学の片影』（昭9・10　中央公論社）には『心の花』の作品の紹介がある。

2　『新思潮』の大正三年五月号によると、五月の帝文が新進作家号をだすので、同人中、豊島と久米とがかいたとあって、芥川の名がみえない。これが五月号の記事なのであるから、帝文より早く『新思潮』の方が準備をし、芥川がすでに「老年」を『新思潮』にまわしたあとで急に帝文の都合で芥川もかくことになり、手近かにあった「桐」をわたしたのではないかとおもわれる。

3　第三次『新思潮』は大正三年六月号のみ未見であるが、多分この号にも短歌はないとおもわれる。

（あとがき）当時の文壇状況において、白秋、勇の影響をうけるのはきわめて自然であった。このことは佐藤春夫等『スバル』系の動きとも関連があるので、改めて考えてみたいとおもう。